

<目的>衣服は各ピースに裁断された布地を縫合してひとつの型を作り上げるが、布地を縫合すると各ピースの幅が狭くなり、出来上がった衣服が規格サイズより小さくなることをしばしば経験する。これは、縫合することにより生じる縫いべりによる結果と思われる。この縫いべり分量という観点から縫い目割りによって生じる縫いべり現象について各種の織物を用い、布の厚さとの関係を報告した¹⁾。今回は衣服の素材として使用される各種の人工皮革を用い、第1に、方向および縫製条件などの違いによる縫いべり分量、第2に、縫いべり現象に関与すると考えられる皮革の物性、すなわち厚さ、剛軟度と縫いべり分量、第3に、縫いべりのモデル図から理論的縫いべり分量などを実験的に検討した。

<方法>試料布として厚さの異なる人工皮革6種類を用いた。縫製条件は試料布をなか表2枚重ねとし、縫合方向はたて、よこ2方向、針目の大きさは3針/cm、縫い代始末として縫い目割、片返し of 2種類、縫い糸は太さの異なるポリエステルスパン糸60[#]、30[#]、8[#]、の3種類とした。

<結果>縫い代始末間における縫いべり分量は、縫い目割より片返しの方が大きくなる。縫い糸間では、細い糸より太い糸の方が縫いべり分量は大きく、これは薄地の皮革において顕著である。方向間における差はみられない。皮革の物性と縫いべり分量の関係では、皮革が厚くなる程、また剛軟度が大きくなる程縫いべり分量は大きくなる。相関係数(r)は、厚さとの関係では $r = 0.95 \sim 0.99$ 、剛軟度との関係では $r = 0.78 \sim 0.83$ である。

1) 永井房子、田中百子; 家政誌, Vol.41, No.12(1990)